

オン・オフ的議論

広辞苑をひくと、安全の項目に「安らかで危険のないこと」と書いてあり、その第一の用例として安全かみそりが載っている。現実には「危険のないこと」など存在しないが、比喻としてはわかりやすく、日常会話で頻繁に使われている。

安全あるいは安全性は、その程度が連続的に変わるアナログ量である。それが多くの議論のなかで、安全か安全でないかという、オンかオフかのデジタル量になってしまう。その境目、しきい値 threshold の取り方次第で、結論が正反対になってしまう。実際には意見がかなり近いのに、賛成と反対にはっきり分かれてしまう。

原子力発電所運転再開の問題は、安全か否かの議論で国論を二分してきた。日常的に安全を口にするとき、それは辞書に書いてある程度の定性的な意味しか持っていない。もし安全を「リスクが少ない状態」と捉えていれば、問題のリスクがどの程度なのかという定量的な議論に発展する可能性がある。安全についての巷の議論は、今なおオン・オフ的な状況が続いている。

われわれが自分の思いを人に伝えるとき、どうしても言葉の助けを借りなければならない。自分の思いはどの言葉を使えば比喻としていちばん適切か、それを無意識に探しながらしゃべっていることになる。したがってたとえ同じ言葉を使っている、伝えたいことが食い違うことは頻繁に起こる。言葉を巡って是か非かの対立が起こるとき、まず同じ思い、同じ意味でその言葉を使っているのか互いに確かめ合い、対立の核心に双方から迫る努力が必要だろう。

安全の場合、議論の核心は「予想されるリスク」の判定だと私は考える。そこで初めて、他の諸々のリスクとの対比のもとで、そのリスクを受け入れるかどうかの総合的な判断が可能になる。